

実践女子大学本『紫式部集』の現状報告

横井 孝

一 実践女子大学本をめぐる問題群

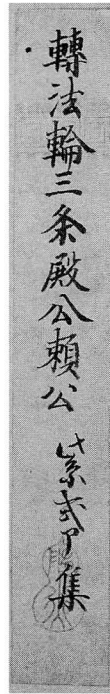
実践女子大学図書館・常磐松文庫に蔵する『紫式部集』は、学内誌の立場からは「常磐松文庫本」と称すべきかもしれないが、「実践女子大学本」の称の知名度が高い。南波浩が校本『紫式部集の研究』校異編（笠間書院、一九七二年九月刊）に用いた三八本のなかから主底本とし、さらに簡便な体裁で広く流布した岩波文庫『紫式部集（付藤原惟規集）』伝本研究編（岩波書店、一九七三年一〇月刊）、また『新編国歌大観』などの底本にも採用されてからは、斯界では標準的テキストとして周知するようになったのである。その間、阿部秋生・前田裕子^①、野村精一^②ら先学が、身近にあった便宜もあって、該本について詳細な報告をしている。そのほかにも南波浩が前掲書のなかで、諸本研究の立場から「実践女子大学本」の位置づけをおこなっていることは言うまでもない。

そこで話題にされたことは多岐に亘るが、『紫式部集』全般にかかわることは措いて、実践女子大学本それ自体の

問題、つまり現状の形態についての主な議論は、次のような諸点をめぐる問題であったかと思う。

(1) 極札・添付文書について

〔写真1〕 極札



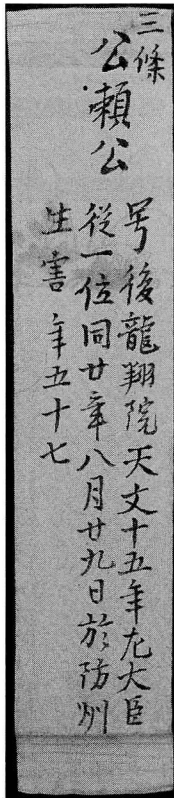
実践女子大学本には、右の〔写真1〕のような畠山牛菴の瓢箪型の朱印を押した「轉法輪三條殿公頼公 紫式部集
〔印〕という極札(二四・六×二・二cm)がある。裏印はない。さらに、

三條

公頼公

号後龍翔院天文十五年左大臣
従一位同廿年八月廿九日於防州
生害年五十七

〔写真2〕 添付文書



と記す紙片(一七・三×三・五cm)〔写真2〕が添付されている。しかし、これが奥書にある年紀「天文廿五年」と齟齬があることは既に前記の阿部・前田らに指摘され、本稿稿者・横井も別に詳述した³⁾。すなわち三條公頼は、天文

二〇年（一五五一）周防大内氏のもとにあり、陶隆房（のち晴賢と改名）の乱に巻き込まれ、添付の紙片にあるとお
り八月二十九日に横死しているのである。実践女子大学本が公頼筆であることが確実ならば奥書の「天文廿五年夾鐘上
澗書写」はありえず、「天文廿五年」を信ずるならば公頼筆ではありえない。江戸期の極めなるものが信用ならぬも
のであることは繰り返し野村なども指摘するところであり、実践女子大学本のそれについても例外ではない。奥書の
信憑性とも関連する事項ではあるが、添付の文書が伝承にとどまるものでしかないことは明らかである。

気がかりなのは、牛菴の極札に筆者名とともに「紫式口集」とあることだ。通常こうした極札は、鑑定の対象作品
の冒頭を写すもののはずだが、現状の実践女子大学本の題簽には「むらさき式部集」とある。しかも題簽上部に汚損
めいた墨痕があり、それが単なる汚れなのかどうか。錦地表紙が改装であることはまちがいないので、あるいは旧題
簽を切り抜いて貼付したものであろうか（田中登氏の教示による）。今の段階では不明とするしかない。

（2）収録歌ないし本文について

作品本体にかかわる事柄だけに前記のすべての先学の論ずるところであって、問題点というべきは、ほぼ指摘済み
の事柄が少なくない。

① 収録歌一二六首は現存諸本のうち最大のものであること。

南波、阿部・前田が指摘するように、

- a、ほかの定家本にない歌が実践本の19番歌から22番歌、57番歌から59番歌にあり、
b、古本系にない歌が該本の61・65～67・69～71・74～75・114～118番歌などに見ることができ。

これらa・bにかかわる歌群は本来備わっていてしかるべきものとされ、いまのところ異論があることを聞か

ない。

② 「日記歌」を付載しない形態であること。

『源氏物語』研究が成立論に明け暮れたころ、『紫式部日記』も現存本が残欠か否かを議論される時期があった。『紫式部』日記歌なる文献に現存『日記』に見えぬ歌が含まれることから、それが残欠であることを示唆する資料であると論じられたのである。

南波浩は前掲著において、古本系『紫式部集』巻末の「日記歌」と『紫式部』日記歌を弁別すべき必要を説き、後者は前者の断簡と『赤染衛門集』の断簡が合綴されたものに過ぎないと説く。一方、稲賀敬⁴は、赤染衛門のもとで『栄花物語』編纂資料として現存本以前の形態の『日記』から抽出されたのが「日記歌」だとして、定家本は「日記歌」によって増補された形態という見通しを立てている。

『日記』首欠説は、現存『日記』とは別個の「日記」の存在説に移行して考えられているようだが、稲賀に敷衍した論は今後の展開を待つ状況といえる。

③ 本文の脱落箇所が複数あること。

南波浩は校定本で「あつて然るべき歌」（岩波文庫・凡例）として古本系から「おりからをひとへにめづる花の色はうすきを見つうすきとも見ず」（実践本の51番歌と52番歌の間）と「いづくとも身をやる方の知られねば憂しと見つつも永らふるかな」（実践本の123番歌と124番歌の間）を挿入する。

そのほかにも「かへし」とのみあつて返歌のない箇所、二行から数行の空白部分があつて欠脱を示唆する箇所など、南波・野村らが指摘している。

(3) 瑞光寺本との関係について

南波浩が、定家本系のよるべき本としての瑞光寺本に出会ったいきさつは一九六七年の南波稿「定家本紫式部集についての一考察——新資料瑞光寺本紫式部集による」⁵⁾に記されている。そののちさらに実践女子大学本が見出され、「瑞光寺本の親本」「瑞光寺(本)は実践本の直流」とみとめられたため、南波の同稿は前掲書『紫式部集の研究』校異編には収められなかったが、実践本・瑞光寺本はわずかな異同があるだけで、現存伝本中「最も信頼のできる伝本」(前掲著、一五七頁)とされている。

二〇〇七年、瑞光寺住職・川口智康師の格別のご配慮と廣田收の熱意あふれる仲介によって、該本の調査をすることができた。南波浩の調査から約四〇年ぶりということになる。その成果の一部は廣田收・久保田孝夫・横井孝二編著『紫式部集大成(実践女子大学本/瑞光寺本/陽明文庫本)』、笠間書院、二〇〇八年五月)にまとめることができ。両本の関係について、南波の結論を変更する材料はいまのところないと考えてよいと思う。

(4) 奥書について

奥書には多くの疑問点が指摘されている。阿部・前田、野村など、親しく該本に接する機会が少なくなかったため、かえってさまざまな疑問を呈することになった。おもな問題点として右の諸氏は、

- a、字体に不審があること、
- b、字体に関連して、「筆跡本(あるいは「筆証本」)」「癡老(あるいは「癡老」)比丘」などの紛らわしい語に不審があること、
- c、前記したように「天文廿五年」の年紀に不審があること、

などを挙げる。いずれの不審も、本来は扱べき資料である奥書の問題であるだけに、実践女子大学本において大きなアポリアということができるとは思えない。

存在しないはずの年紀については、旧稿にふれたことがあるように、かならずしも問題にならない場合もあり、あるいはそのまま問題としてよいのか考えさせる類例もある。不審とは申せ、その見極めは簡単に結論づけることができない。しかも、問題の箇所、「…文廿…」のところには大きな擦り消しの痕跡があつて、不審をより大きなものになっている。以下、その点を中心に検討を加えてみよう。

注

(1) 阿部秋生・前田裕子「紫式部集 一冊(調査報告二)」(本誌Ⅱ実践女子大学文芸資料研究所『年報』第一号、一九八二年三月)。

(2) ①野村精一「文芸資料研究所廿周年記念展示会「出展書の見どころ」拾遺——1「むらさき式部集」(実践女子大学文学部『紀要』第四二集、二〇〇〇年三月)、②野村精一「作家・作品・作者——むらさき式部のばあい」(『源氏物語研究集成・第15巻『源氏物語と紫式部』』風間書房、二〇〇一年一月)

(3) 横井孝「実践女子大学本『紫式部集』奥書考——年紀への疑惑をめぐって」(『国語と国文学』第八四巻第一号、二〇〇七年一月)。以下、単に「旧稿」という場合、この稿を指すこととする。なお、同稿は、大幅に抜粋加筆改稿して、久保田孝夫・廣田収・横井共編『紫式部集大成』(笠間書院、二〇〇八年五月刊)にも『紫式部集』実践女子大学本と瑞光寺本」と改題して収めた。

(4) 稲賀敬二「紫式部と「日記歌」と「集」——旧稿「逸文資料」の補遺」(『源氏物語の研究——物語流通機構

論』笠間書院、一九九三年七月。初出一九八九年。

(5) 南波浩「定家本紫式部集についての一考察——新資料瑞光寺本紫式部集による」(『国語国文』第三六巻第五号、一九六七・五)。

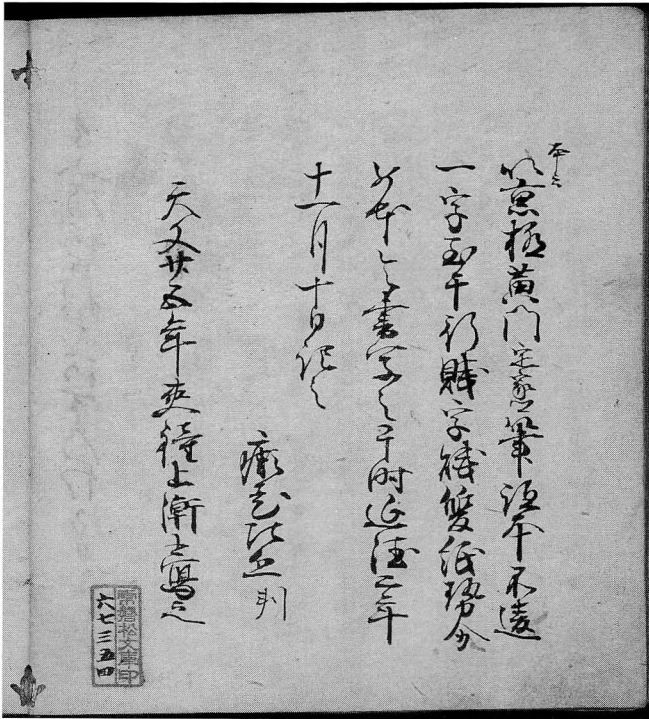
二 削訂(擦り消し痕)の現状

奥書における削訂(擦り消し)痕についても阿部・前田の論以来指摘されている問題であるが、年紀の問題と直接関連して解決しにくい状況として現前している。該本の奥書は、右にあげた先学の諸論のほかにも何度か公表されているが、あらためて次頁に掲げておこう。〔写真3〕

印刷の状況によっては鮮明でないかもしれないが、あるいは右でも「天文廿五年」あたりに黒ずみとにじみが見て取れるかもしれない。該本を凝視すると、問題の箇所繊維のケバ立ちがあるのである。いったん書いた文字の紙面を何らかの方法で摩擦してケバ立たせ、元の文字が薄れるか消えるかした上から訂正した文字を書き重ねてしまうのである。そのため、抹消された文字の部分には黒ずみが残ったり、上から書き重ねた墨のシミが他と異なって識別しやすくなる。このような本文の修正方法について、他に類例を見出すのは容易といつてよからう。

京都・古代学協会蔵『源氏物語』——いわゆる大島本には、いたるところにその痕跡を見ることができ、ほぼ全帖に認められるのではない。たとえば、桐壺の巻の一丁オモチなど⁶、傍書が擦り消しの上に重ね書き修正されることが多いようだが、本行の本文にも、たとえば夕顔の巻五一丁ウラ5行目「いとおそろしとおもひたりしさまの……」とあるところ、「おひ」と「ひ」字の左半分を書きさして擦り消し、上から「もひ」と重ね書きしている。や

や乱暴とも見られる擦り消しのしかたであるために紙の繊維が乱れている箇所が多く、破損してしまっている箇所もあり、また、下の字が透けて見えることも少なくない。



〔写真3〕奥書

本云

以京極黄門定家卿筆跡本不違

一字至于行賦字賦雙紙勢分

如本令書写之于時延徳二年

十一月十日記之

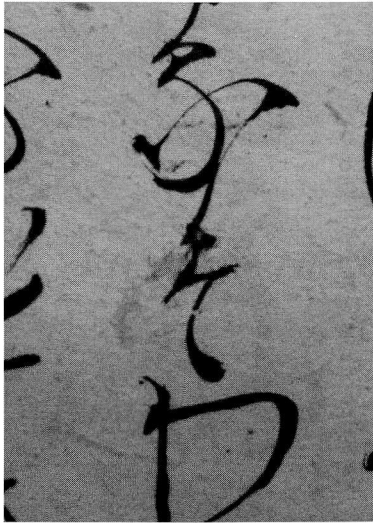
癩老比丘判

天文廿五年夾鐘上澣書寫之

河内本の代表的本文ともいべき尾州家本にも、同様なことがすでに指摘されている。すなわち「いったん書写された本文が丁寧に削り取られ」その上から「別の本文に書き換えられている」というのである。『源氏物語大成』校異篇において、青表紙本文の形態についてはかなり詳細に示されているものの、出版の都合で河内本・別本の校異が簡略化されたことはよく知られている。そのため、実見に及ばなければ気づけなかった問題である。

著名な青谿書屋本『土佐日記』の場合はより徹底していて、「鋭利な刃物を紙面に垂直に当てて誤字を丁寧に削り去」っただけでなく、「粗くなった紙面を摩擦して平滑にした上で、改めて正しい文字を書くという入念な方法」⁸⁾によったもので、六一箇所を数えるという。

当該の実践女子大本『紫式部集』の場合は擦り消したあと「紙面を摩擦して平滑に」するまでのことはしておらず、奥書を含めて一〇箇所ほどを数えることができる。別稿に、擦り消し痕（削訂）などの所在や紙面の状況を、概略のみ示しておいたが、あらためてここに影印とともに現状を報告しておく。



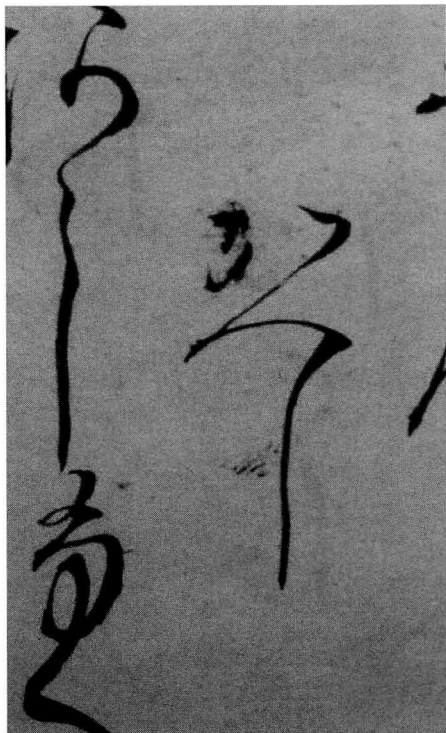
〔写真4〕二才4行目

五 いつれそといろわくほとにあさかほの
あるかなきかになるそわひしき

(1) 二才4行〔紫式部集大成〕一九三頁下14行)「なるそわひしき」

「そ」字の中央から左下へ繊維がめくれあがつた上から押さえつけられたため、シミが左下へ斜め楕円に拡がっているように見えるはずである。擦り消しの繊維が荒れた上に書いたため、「そ(字母・曾)」の一筆目・二筆目あたりが擦れている。その様相を拡大して〔写真4〕に示しておこう。直上の「る(留)」から「そ」の一筆目への連綿の線が不自然なもの見てとれるだろう。擦り消したのは、字の一部分であるらしく、まともな字形を読み取ることとはできそうにない。

(2) 二ウ6行(一九四頁上11行)「かへし」



〔写真5〕二ウ6行目

かへし

九 あらしふくとを山さどのもみちは、

このしたならてゆくこゝろかは



「か」字は、擦り消しの上に書いたため、「か（字母・加）」の一筆目がかすれて筆の肥瘦ただならぬように見受けられる。また、三筆目は、下にやや薄い墨が見えており、右上にわずかに撥ねているらしいのだが、その字の上から三筆目をなぞって、直下の「へ」に連続で繋げている。擦り消した字は残念ながら読めないが、あるいは同じ「か」を書き直したのか。「し」の左脇には墨の汚損がある。筆の毛先か指紋の擦れのように見える。

なお、この箇所だけ見ると「か」字はやや不自然に見えなくもない。「か」の一筆目が左外側に大きく湾曲し、二筆目が極端に短い。しかし、この「か」字はこの本の書写者の書き癖らしく、他にも多く見られる。一才4行「かへり」、同6行「くもかくれ」、二才10行「かきたえめ」、三ウ4行「かはら」等々、枚挙に遑がない。

(3) 三ウ6行(二九四頁下8行)「をるをにく／みて」

〔写真6〕三ウ6行行末

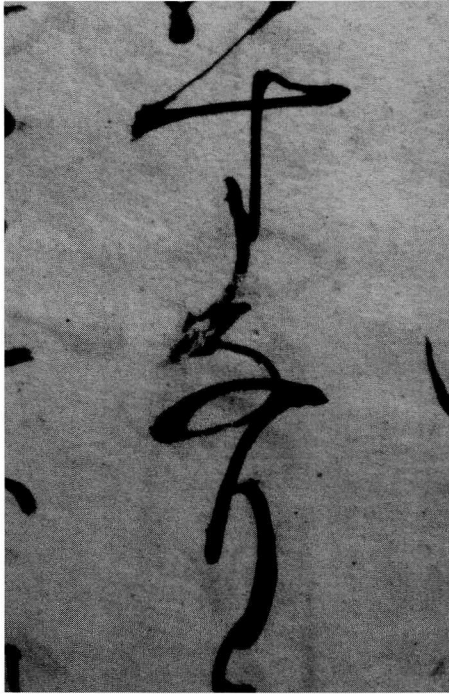
かうふりにてはかせたちをるをにく
みて

一四 はらへとのかみのさかりのみてくらに

……

「に」全体と「く」の上部に擦り消した痕跡がある。「にく」の下に「みて」字の墨痕がかなり明確に見えている。いったん「:をるをみて」と書いたのち、書写者自身が目移りに気づいて「:をるをにく／＼（改行）みて」と修正したものである。前記の青谿書屋本『土佐日記』のように、擦り消して「粗くなった紙面を摩擦して平滑にした上で、改めて正しい文字を書く」という手間をかけていないため、紙の繊維の毛羽立ちで「に（耳）」の墨が紙面に乗らずにかすれてしまっている。また肉眼では見えにくい「く」字の周囲に「て（天）」の墨痕が残っているのが、この拡大写真では見ることが出来る。

(4) 一三才8行（一九八頁下16行）「おもはすなり」



〔写真7〕一三才8行目

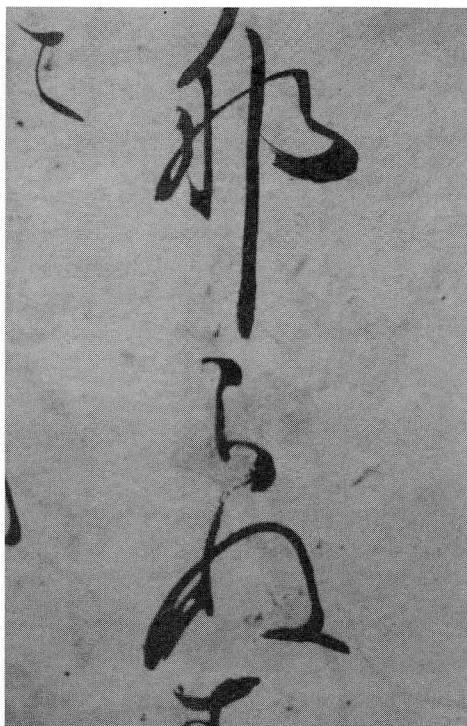
身をおもはすなりとなけくことの
やうく／＼なのめにひたふるのさま
なるをおもひける

五四 かすならぬこゝろに身をはまかせねと
身にしたかふは心なりけり

「な」字上部擦り消しの上に書く。上の「す」字からの連綿がかすれ、「な（字母「奈」）」の一筆目と不自然に重ね書きされているのが見える。また、「り」の二筆目下部は重ね書きしているため、肥瘦が通常と異なり、重ね書きした箇所は墨の濃淡が見て取れる。

ここは擦り消しが字画のごく一部のため、下に何の字を書こうとしたのかは定かでない。

(5) 一三ウ1行（一九八頁下19行）「かすならぬ」



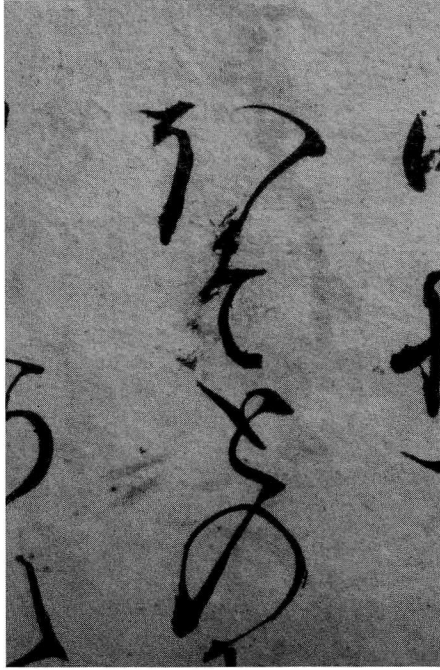
〔写真8〕 一三ウ1行目

五四 かすならぬこゝろに身をはまかせねと
身にしたかふは心なりけり

「ら」字の二筆目以降に擦り消しの痕跡あるか。「ら」字から「ぬ」字への連綿が、〔写真7〕のように拡大してみ

ると、やや不自然であることに気づく。「ら」の最終が連綿にならず、中途半端に終わったのを、墨を接いで「ぬ」字への連綿にしたと見える。「ぬ」字自体も左下の部分に不審な重なりがあるが、ここは擦り消し痕がないので、墨を継ぎ足した箇所と見られる。いずれにせよ部分的な削訂である。

(6) 二三才6行(二〇三頁上7行)「ほそとの」



〔写真9〕二三才6行行頭

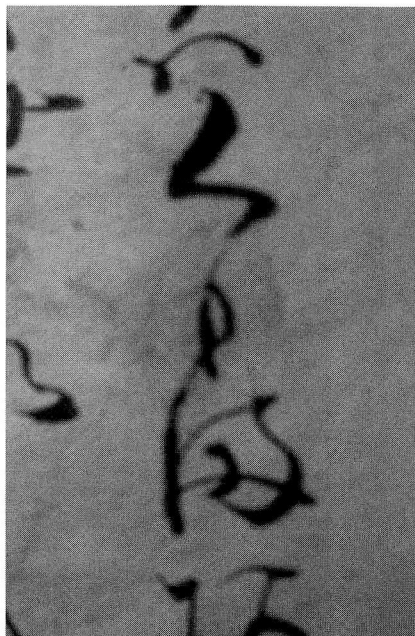
中将せうしやうと名ある人々のおなし
ほそとのにすみて少将のきみをよな
くあひつゝかたらふをきゝてとなり
の中将

一〇〇 みかさ山おなしふねとをさしわきて
かすみにたにのへたてつるかな

「そ」字、擦り消しの上を書く。「そ」の直上と左下に二箇所墨痕が見えるが、二三才5行目「むまれ木」の「れ」字の裏写りがあって、写真以上に実際には判別しがたい。下の「と」字の一筆目のすぐ上に斜めの汚れのごときものが見えるが、これが擦り消した字の残画とすれば、「に(尔)」か「少」の字に見える。いずれも同じ行の下にある字

なので、手が先に行き過ぎた自然な誤りということになる。なお、「と」の左隣にわずかに右上がりに見える二重の線は汚れか繊維屑と思われる。

(7) 二六オ6行(二〇四頁上21行)「くもまあれと」

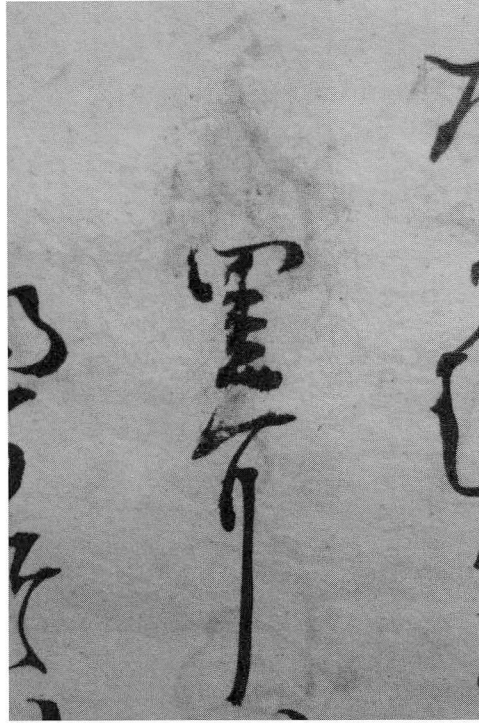


〔写真10〕二六オ6行目

一一六 ことはりのしくれのそらはくもまあれと
なかむるそてそかはく世もなき

「く」は書き出しを「ノ」のごとく書きさした上に重ね書き、「も」字全部と「ま(字母・満)」の上部は擦り消しの上に書いたため、ややかすれている。削られた字は読めないが、「も」字よりもかなり大きく広範囲に削つてあるところを見ると直下の「ま(満)」を書こうとしたか。

(8) 二六オ 8行 (二〇四頁上23行) 「里」について、「



〔写真11〕 二六オ 8行

里について、大なこんのきみふみ

たま／へるついでに

一一七 うきねせし水のうへのみこひしく

て」(二六オ) かもものうはげにさ

えそおとらぬ

一一七番歌「うきねせし……」の詞書冒頭であり、行頭にあたる。「里」は擦り消しの上に書いたためかすれているが、さらにその上、隣の一一六番の下句「なかむるそてそ……」とはほぼ同じ字高の箇所から擦り消し痕がある。擦れ消し痕のある箇所は、透過光で見ると問題部分がかかなり薄くなっており、よりその範囲が明瞭になる。

詞書の書き出しであるにもかかわらず、和歌と同じ字高に二、三字を書き出してしまったことに気づき、削り消したのである。擦り消しをして毛羽立った紙の繊維を平らにしないまま書いたので、「里」字は墨がわずかに滲み、「に(耳)」字の上部第一筆目あたりがかすれてしまっている。

以上、八箇所を擦り消し部分を検討した。このほかにも、一五ウ4行目「いけのか、り火に」(六六番歌の詞書の「り」字を中心として大きく丸く紙繊維が薄くなっている箇所や、一〇オ2行目「さしをかせる」(四〇番歌の詞書末尾)の「せ」に重ね書きらしき墨汚れ、一三ウ5行目「はしめてうちわたりをみるにも」(五六番歌の詞書の「て」字にも重ね書きがあるらしいことなどがあげられる。いずれも数字程度の削訂であり、目移り・誤記などの単純な錯誤を筆写者自身が修正した箇所と推定できるもの、と見てほぼまちがいなからうと思われる。とすれば、実践女子大学本『紫式部集』において、最も重大な削訂箇所——奥書の問題は、右の諸例と相対化できるものなのかどうか。次節で検討してみたい。

注

(6) 大島本・若紫の巻、物語本文の最後の見開き(五八ウ〜五九オ||角川書店影印五〇〇〜五〇一頁)にも傍記部分の擦り消し痕が著しい。影印でもある程度確認できるが、二〇〇八年一〇月に国文学研究資料館でおこなわれた「源氏物語 千年のかがやき」展には若紫の当該部分が展示されていたので、同展に足を運んだ方は実見されているはずである。該本の削訂を含む本文の様態については、藤本孝一「大島本源氏物語の書誌的研究」(『大島本源氏物語 別巻「大島本源氏物語の研究」』角川書店、一九九七年四月刊、所収)の「本文様態注記表」が詳細を究めている。

(7) 加藤洋介「河内本本文の成立——「舊尾州家藏河内本源氏物語存疑」続紹」(『講座 平安文学論究・第十輯』風間書房、一九九四年一〇月刊、所収)一七二〜一七四頁、岡島偉久子「尾州家河内本源氏物語の書誌学的考察——鎌倉期本文の成立」(横井孝・久下裕利編『源氏物語の新研究——本文と表現を考える』新典社、

二〇〇八年一月刊、所収) 一〇四〜一一六頁に詳細な指摘がある。また大内英範「尾州家河内本帯木の書写 様態をめぐって」(同) にも指摘がある。

(8) 萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店、一九六七年八月刊)「凡例にかえて」一四頁。

(9) 横井孝「実践女子大学本『紫式部集』の現状、その他——その擦り消し痕・『紫式部集大成』拾遺など」(『実践国文学』第七四号、二〇〇八年一〇月)。

三 奥書の削訂(擦り消し痕)の現状

実践女子大学の奥書の問題点については、前記のように、くり返し説かれてきた。本来は書誌情報として最も扱い所となるはずの奥書に、存在しないはずの年紀が書かれているということ、しかも事もあろうに、その疑義のある年紀の部分に削訂の痕跡が存する、という駄目押しにちかい事実があったからである。

これまでこの奥書の状況、最も早く詳細に検討したのは、本誌創刊号に収める阿部秋生の解題であったかと思われる。その見解に傾聴してみよう。

……判読しがたいわけではないが、最後の日附「天文廿五年」の「廿」の部分の紙が少し毛羽立って見える。つまり、「廿」は、一度書かれた字を削って消し、その上に書いたかに見える。「天文」という年号は、二十四年十月二十三日で「弘治」と改元されたということもあるので、この料紙の毛羽立ちが目につくのである。写真では判定しにくいだが、この「廿」は、この行の他の字とは墨色が違っているし、書風も違っていると考えられ、云ってみれば、この奥書の他の字よりも若い人の字ではないかと思われる。こまかに見ると、「廿」の右下の点も二

重に打つてあるらしく、濃い墨と薄い墨とが部分的に重なっている。「廿」と「五」とは切れ目なしに筆がつづいてるように見えるが、原本では墨色を異にし、筆勢を異にしている。

写真でみると、「廿」と「五」とは切れ目なしに筆がつづいてるように見えるが、原本では墨色を異にし、筆勢を異にしていると見るべきである。下に文字が書かれていたもののように見えるが、その文字を推測しがた。何故、改元のあつたことを無視して「廿五年」としたのかも推測しがたい。¹⁰⁾……

右のような疑問を呈しながらも、一方で筆跡については、畠山牛菴の極めのように三条公頼のそれとは認められないものの、「天文」ころ、室町時代末期のものともみることではできずであろう」と慎重な判断を下している。

ついで、野村精一も当該の奥書をつぶさに観察した一人であつた。奥書の持つ不審の条々——「筆証本」「行賦字賦」「癡老」等の紛らわしい字体の問題五箇条をあげてゆき、その最後の項目に、次のように指摘する。

五、「正廿」の部分、わずかなケバ立ちがあり、おそらく削つたうえに、重ね書きしたものと認められる。しかし、天正は廿四年までしかない。わざわざ重ね書きする必然は考えられない。本奥書の最大の不審というべきところ。しかも、「極め」にいう「三条公頼」は、別の「極め」には、「天正廿年」に「於防州生害」とある。

……「五」のそれは、明解をうることはほとんど不可能に近いが、一つの想定としては、右のような高からぬ知的水準の持ち主ですら気付いたならかのミスを削り消した上に、強い筆で「廿」と重ねたのではあるまいか。あるいは「天正」じたいが、書き加えの可能性もある。僻遠の地なるがゆえのそれと見做すには、時間の経過がありすぎる。なお、この削り消した文字を「十」と想定する向きもあるが、やや細すぎる。想定不能とするにしくはないか。¹¹⁾

なぜか野村は、「天文廿五年……」の写真を掲げつつ、すべて「天正」と誤っているが、当然「天文」とあるべきと

ころ。ここでも問題視されるのは毛羽立ちと年号の関連であった。野村は、さらに別稿を継いで、不審の簡条をさらに八項目に細分し、

いずれもこの写し手の、書き本に対する読解能力の問題に帰せられるのではあるまいか。思うに、この写し手の古典的知識の程が問われる写し様であり、一見能筆だが必ずしも然るべき「才」の持ち主ではなかったように見える。加えて、8（横井注―年号の問題の条）である。それも天文二五年があるならばとにかく、天文は二四年までしかないのだから、困惑は深まる。あえて誤訂を加えることの意味は理解しがたい。いえば、そのことすら認識しえない程度の書写の水準を示すともいいうる。¹²⁾

と、前稿の言説を補強している。両碩学の指摘するところは明晰であり、その分だけ否定しうべくもない。しかも、南波浩による定家本系統最善本の評価をくつがえしかねない、重大な問題をはらんでいるのである。先年、京都市京都文化博物館で開催された「源氏物語千年紀展」で本書が展示された際、その図録に「定家本の最善本とされる」（傍点―横井）といい、「奥書に「天文二十五年」とあるが天文は二十四年までであり、議論を呼ぶところである」と付記されているのも、その影響力のおよぶところであつたろう。

しかし、情報の伝達の経路・方法・速度を検証しないまま、情報化社会に生きる現代人の感覚で改元を議論するのは観念的にすぎるのではないか。先述のくり返しになってしまいが、南北朝・室町期には、政治的・軍事的立場によって改元を受け入れなかつたり、あるいは身の置き所によって旧年号をかなり後まで使い続ける場合もあつた。したがって、「天文廿五年」は当初から存在しないものとする議論は、かえって先入主を持つことになりかねない、実践女子大学の奥書の疑問点とする決め手としては、ある程度の留保を加えなければならない――とは、旧稿に述べたこととのくり返しに他ならない。



〔写真12〕 奥書・部分拡大

とすれば、問題は擦り消し痕（削訂）自体に焦点を絞らざるを得ない、ということになろう。しかし、現実的には、その擦り消し痕なるものはたかだか1cm四方の大きさに過ぎないものだ。前節に本書の削訂の実例を見てきたように、拡大するしか検討の余地がないのである。次に、問題の箇所特殊撮影（斜光）した写真をあげてみよう。

旧稿にも載せたものだが、問題意識を共有して下さる向きはなくてもなかったものの、掲載写真が小さかったためか、直接これに対する反響はほとんどなかった。ただ、毛羽立ちの部分は肉眼では判然としないところではあるけれども、このように拡大してみればかなり鮮明になっているはずである。〔写真12〕に紙の繊維の乱れ⇨毛羽立ちの顕著な箇所を輪郭をつけたのが、次の写真である。

〔写真13〕 奥書・部分拡大の毛羽立ち箇所（枠内）



〔写真13〕によれば、「天文廿五」の二文字にかかる紙繊維の乱れではあるが、「文」の下半分と「廿」の全部がその範囲ということになる。削除された文字は一字分としてはやや大きく、二字分としては小さ過ぎるということになる。これは何を意味するのであろうか。

気がつくことは他にもある。〔写真12〕にもどってみよう。

〔文〕字の上から左下に払う三画目（二筆目）前半、濃墨と薄墨とが折り重なっているように見える。また、「廿」字の上部に消し残した墨痕があること、「廿」字自体にもあちこちに濃い墨と薄い墨がまだらになっていることも、あらためて気づくことであろう。さらに毛羽立ちのない箇所にも、阿部秋生の指摘にあったように、「五」字も墨を接いだらしいところが見える。先に、本文中の削訂の例としてあげた中に、擦り消しとともに（あるいは擦り消しとは別に）、

（4） 一三才8行（一九八頁下16行）「おもはずなり」

（5） 一三ウ1行（一九八頁下19行）「かすならぬ」

のゴチックで示した文字に、いったん書いた文字の一部に墨を差していたのを見てきた。同断には論じられないかも知れないが、この書写者は時折文字の整形・修正のつもりで墨の継ぎ足しをする癖があるかのごとくに見受けられるのである。

しかしながら、〔写真13〕のように加工してみても、下に書かれた文字は見えにくい。斜光写真は毛羽立ちを浮き彫りにはするが、擦り消した跡は必ずしも消された文字の大きさを保証するものでもない。

そこでさらに同じ箇所を赤外線写真におさめたのが、次頁の〔写真14〕である。赤外線撮影することによって、肉眼では確認できない墨の濃淡、影を検出することができると考えたからである。

〔写真14〕 奥書・部分拡大の赤外線映像



これによって墨の濃淡がかなり鮮明になったのではないだろうか。

つまり、「文」字は濃墨と薄墨とが重層しており、薄い墨の上に濃墨が継ぎ足されて現在の字形になっているのである。右に話題にした、上から左下に払う三画目（二筆目）は大きく左に払っているが、もともとこれは薄い墨で、その途中まで濃墨が重ねて塗られているらしい。一画目から二・三画目（一筆目から二筆目）が当初は少し垂直に近かったものを、やや右手から遠回りして左払えの線に合流するように書かれたものであった。



ということとは、「文」字の下には、少しく字形は異にするが、同じ「文」の字が書かれていたと見なすことができようか。

「廿」字は最も繊維が乱れて凸凹が激しくなっているところに書いたため、いったん墨が乗らずに擦れているところに、濃い墨を何箇所かにも重ね塗られているのではないか。しかも、「廿」字の周辺にはだいたい散らされてしまっているもの、墨痕らしい影が見える。それを縁取ってみると次のような図になる。

〔写真15〕 赤外線映像による墨痕の輪郭

墨痕と見える範囲をどこまで縁取るか、正直に申せばむずかしい。擦り消ししたために墨痕が拡散しているかもしれない。だからこそ右の図の判断が絶対と胸を張る自信はない。しかし、赤外線線の映像で捉えられた影が墨痕であるとするれば、下に書かれていたのは、明らかに「十」の字形ではあり得ない。確実に存在した「天文十五年」と合理化することでお茶を濁すわけにはゆかない、ということなのである。あるいは、極端なことをいえば、年号としてはさらにありえないはずの「卅」「卅」であったかもしれない。あるいはまた、可能性は低いけれども、削除されたのは完全な一字の形態ではなかった場合も考えられないわけではない。

しかし、右の図Ⅱ〔写真15〕で縁取つてみたような、まともな形をなしているのか否か、微妙なあわいのなかで、あえて大胆に申せば、直上の「文」字の場合から類推して、「廿」字の下にも、字形はやや異なるがやはり「廿」の字が書かれていた、と考えてみてはいかがなものだろうか。現状の「卅」の横棒線の右上部に墨が重ね塗りされている。もともとは細い横線があったのである。そこに縦の棒線が二本あるいはそれ以上、現在のそれとはずれるところに引かれていた、という可能性もまた存するのである。

つまり、疑惑の目でみられてきた「天文廿五年」の表皮をめくってみたら、下地からやはり「天文廿五年」が現れた、という結果を想定してみるのである。大変皮肉な結果である。アポリアは、どこまでいってもアポリアなのだろうか。

少なくとも、実践女子大学本『紫式部集』の問題の奥書の現状は、いまのところ右のように報告するほかはない。

注

(10) 阿部秋生・前田裕子、注(1)前掲稿「紫式部集 一冊」〔年報〕第一号)、七二頁。

- (11) 野村精一、注(2)①前掲稿「文芸資料研究所廿周年記念展示会「出展書の見どころ」拾遺——1「むらさき式部集」」、一四～一五頁。
- (12) 野村精一、注(2)②前掲稿「作家・作品・作者——むらさき式部のばあい」、一四～一五頁。
- (13) 京都文化博物館編『源氏物語千年紀展〜恋、千年の時空ときをこえて〜』(京都府・京都市・同館ほか、二〇〇八年四月)、六四頁。

付記

本稿をなすに先立って、二〇〇八年一〇月、田中登、久保田孝夫両氏の来訪を受けた。両氏よりさまざまな教示にあずかったが、本稿にはその一部のみ反映することができた。他については後日を期したい。両氏の教示に篤く感謝申し上げたい。